

田山 花袋

田舎教師

日本語

近現代文学



КАРО
Санкт-Петербург

УДК 811.521
ББК 81.2 Яп-93
Т 25

Таяма Катай.

Т25 Сельский учитель : книга для чтения на японском языке / Катай Таяма. — Санкт-Петербург : КАРО, 2023. — 320 с. — (近現代文学).

ISBN 978-5-9925-1667-8.

Когда-то настоятель буддистского храма Кэмпукудзи передал своему другу Таяме Катаю дневник прихожанина, юного учителя начальной школы. Именно на его основе Таяма Катай создал повесть «Сельский учитель», которая до сих пор любима в Японии и считается одним из лучших произведений новой японской литературы.

Реального прототипа «сельского учителя» звали Кобаяси Хидэдзо. Как и герой будущей книги, Хидэдзо уехал в провинциальный город и поступил на службу в маленькую деревенскую школу. Каждый день, отправляясь на работу, он проделывал путь в шесть километров по сельским дорогам.

Сегодня тихий городок Ханиу стал центром паломничества, а обычный сельский храм является главной городской достопримечательностью. При храме воссоздана комната Кобаяси Хидэдзо, где каждый посетитель может ощутить атмосферу того времени и пройти дорогой «сельского учителя». Сотни японцев ежегодно проходят эти шесть километров, чтобы лично повторить путь, который молодой учитель проделывал дважды в день, и на этом пути подумать о своей жизни и надеждах...

УДК 811.521
ББК 81.2 Яп-93

ISBN 978-5-9925-1667-8

© КАРО, 2023
Все права защищены

四里¹の道は長かった。その間に青縞《あおじま》²の市《いち》のたつ羽生《はにゆう》の町があった。田圃《たんぼ》にはげんげが咲き、豪家《ごうか》の垣からは八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出《けだし》を出した田舎の姐《ねえ》さんがおりおり通った。

羽生からは車に乗った。母親が徹夜《てつや》して縫ってくれた木綿《もめん》の三紋《みつもん》の羽織に新調のメリンスの兵児帯³《へこおび》、車夫は色のあせた毛布《けつとう》を袴《はかま》の上にかけて、梶棒《かじぼう》を上げた。なんとなく胸がおどった。

¹ Ри — традиционная дальневосточная единица измерения расстояния, равная 3,923 км.

² Некоторые сложные для прочтения и устаревшие слова даны знаками азбуки хирагана в кавычках.

³ Хэко-оби — пояс из мягкой ткани. По сравнению с плотным оби из шелка на подкладе, он не кажется тесным, поэтому его можно использовать для повседневной носки. На хэко-оби идут такие материалы, как креп, муслин, чистый шелк и синтетические волокна. Часто украшается вышивкой о-сибори. Изначально такие пояса повязывали детям, а в эпоху Мэйдзи (1868–1912) они приобрели популярность в женском и мужском костюмах.

清三《せいそう》の前には、新しい生活がひろげられていた。どんな生活でも新しい生活には意味があり希望があるように思われる。五年間の中学校生活、行田《ぎょうだ》から熊谷《くまがやま》で三里の路みちを朝早く小倉¹《こくら》服着て通ったことももう過去になった。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍はべる芸妓《げいしゃ》なるものの嬌態《きょうたい》にも接すれば、平生《へいぜい》むずかしい顔をしている教員が銅鑼声《どうらごえ》を張《は》り上げて調子はずれの唄《うた》をうたったのをも聞いた。一月《ひとつき》二月《ふたつき》とたつうちに、学校の窓からのぞいた人生と実際の人生とはどこことなく違っているような気がだんだんしてきた。第一に、父母《ふぼ》からしてすでにそうである。それにまわりの人々の自分に対する言葉のうちにもそれが見える。つねに往来《おうらい》している友人の群れの空気もそれぞれに変わった。

ふと思い出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治《かとういくじ》と熊谷から歩いて帰ってくる途中で、文学のことやら将来のことやら恋のことやらを話した。二人は一少女に対するある友人の関係についてまず語った。

¹ Речь о хлопковой одежде из местности бывшего Кокура (современный город Китакюсю) префектуры Фукуока. Хлопок из этих мест еще в старину славился своим высоким качеством. Кроме того, с одеждой из Кокура ассоциировалась особая мелкая полоска на штанах-хакама.

「そうしてみると、先生なかなかご執心《しゅうしん》なんだねえ」

「ご執心以上さ！」と郁治は笑った。

「この間まではそんな様子が少しもなかったから、なんでもないと思っていたのさ、現にこの間も、『おおいに悟った』ッて言うから、ラヴのために身上の希望を捨ててはつまらないと思って、それであきらめたのかと思ったら、正反対《せいはんたい》だったんだね」

「そうさ」

「不思議だねえ」

「この間、手紙をよこして、『余も卿等《けいら》の余のラヴのために力を貸《せ》しを謝す。余は初めて恋の物うきを知れり。しかして今はこのラヴの進み進まんを願へり、Physical なしに……』なんて言ってきたよ」

この Physical なしにという言葉は、清三に一種の刺戟《しげき》を与えた。郁治も黙《だ》まって歩いた。

郁治は突然、

「僕には君、大秘密《だいひみつ》があるんだがね」

その調子が軽かったので、

「僕にもあるさ！」

と清三が笑って合わせた。

調子抜けがして、二人はまた黙って歩いた。

しばらくして、

「君はあの『尾花《おばな》』を知ってるね」
郁治はこうたずねた。

「知ってるさ」

「君は先生にラヴができるかね」

「いや」と清三は笑って、「ラヴはできるかどうかしらんが、単に外形美がいけいびとして見てることは見てるさ」

「Aのほうは？」

「そんな考えはない」

郁治は躊躇ちゆうちょしながら、「じゃ Art は」

清三の胸は少しくおどった。「そうさね、機会が来ればどうなるかわからんけれど……今のところでは、まだそんなことを考えていないね」こう言いかけて急にはしゃいだ調子で、

「もし君が Art に行けば、……そうさな、僕はちょうど小畑《おばた》と Miss N とに対する関係のような考えで、君と Art に対するようになると思うね」

「じゃ僕はその方面に進むぞ」

郁治は一步を進めた。

清三は今、車の上でその時のことを思い出した。心臓《しんぞう》の鼓動《こどう》の尋常《じんじょう》でなかったことをも思い出した。そしてその夜日記帳に、「かれ、幸¹《さち》多《おお》かれ、

¹ Чтение иероглифа «счастье» (устар.), которое до сих пор сохраняется в японском женском имени собственном «Сатико» 幸子.

願はくば幸多かれ、オ、神よ、神よ、かの友の清きラヴ、美しき無邪気なるラヴに願はくば幸多からしめよ、涙多き汝¹《なんじ》の手をもって願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、親しき、友のために願ふ」と書いて、机の上に打《う》っ伏《ふ》したことを思い出した²。

それから十日ほどたって、二人はその女の家を出て、土族屋敷《しぞくやしき》のさびしい暗い夜道《よみち》を通った。その日は女はいなかった。女は浦和に師範《しはん》学校の入学試験を受けに行っていた。

「どんなことでも人の力をつくせば、できないことはないとは思うけれど……僕は先天的にそういう資格がないんだからねえ」

「そんなことはないさ」

「でもねえ……」

「弱いことを言うもんじゃないよ」

「君のようだといいいけれど……」

「僕がどうしたッていうんだ？」

¹ Личное местоимение 2-го лица «ты» (устар.).

² В данном абзаце использованы устаревшие формы классического японского языка бунго, которые, однако, имели хождение вплоть до 1950-х годов. Окончания глагола на -ふ в новой орфографии читаются как -う, показатель -は после глагола «нэгау» 願 следует понимать как わ, употребляемый для образования отрицательной формы; окончания прилагательных на -しき как -しい.

「僕は君などと違ってラヴなどのできる柄がら
じゃないからな」

清三は郁治をいろいろに慰なぐさめた。清三は友
を憫《あわれみ》また己¹《おのれ》を憫んだ。

いろいろな顔と事件とが眼にうつっては消えう
つっては消えた。路には榛《はん》のまばらな並木
やら、庚申塚《こうしんづか》やら、畠《はた》や
ら、百姓家やらが車の進むままに送り迎えた。馬車
が一台、あとから来て、砂煙《すなけむり》を立て
て追《お》い越《こ》して行った。

郁治の父親は郡視学であった。郁治の妹が二人、
雪子は十七、しげ子は十五であった。清三が毎日の
ように遊びに行くと、雪子はつねににこにことして
迎えた。繁子はまだほんの子供ではあるが、「少年
世界」などをよく読んでいた。

家が貧しく、とうてい東京に遊学などのできぬ
ことが清三にもだんだん意識されてきたので、遊ん
でいてもしかたがないから、当分小学校にでも出た
ほうが良いという話になった。今度月給十一円でい
よいよ羽生はにゆう在の弥勒《みろく》の小学校に
出ることになったのは、まったく郁治の父親の尽力
《じんりよく》の結果である。

路のかたわらに小さな門があったと思うと、井泉
村役場《いずみむらやくば》という札《ふだ》が眼に
とまった、清三は車をおりて門にはいった。

¹ Личное местоимение 1-го лица «я» (устар.).

「頼む」

と声をたてると、奥から小使らしい五十男が出て来た。

「助役さんは出ていらっしゃいますか」

「岸野さんかな」

と小使は眼をしょぼしょぼさせて反問《はんもん》した。

「ああ、そうです」

小使は名刺と視学からの手紙とを受け取って引っ込んだが、やがて清三は応接室に導《みちび》かれた。応接室といっても、卓テーブルや椅子《いす》があるわけではなく、がらんとした普通の六畳で、粗末《そまつ》な瀬戸火鉢がまんなかに置かれてあった。

助役は肥ふとった背の低い男で、縞《しま》の羽織《はおり》を着ていた。視学からの手紙を見て、「そうですか。貴郎《あなた》が林さんですか。加藤《かとう》さんからこの間その話がありました。紹介状《しょうかいじょう》を一つ書いてあげましょう」こう言って、汚きたない硯《すずり》箱をとり寄せて、何かしきりに考えながら、長く黙って、一通の手紙を書いて、上に三田《みた》ヶ谷《や》村《むら》村長石野栄造様という宛名あてなを書いた。

「それじゃこれを弥勒《みろく》の役場に持っていらっしゃい」

弥勒まではそこからまだ十町ほどある。

三田ヶ谷村といっても、一ところに人家がかたまっているわけではなかった。そこに一軒、かしこに一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠はたの向こうに一軒というふうで、町から来てみると、なんだかこれでも村という共同の生活をしているのかと疑われた。けれど少し行くと、人家が両側に並び出して、汚ない理髪店《りはつてん》、だるまでもいそうな料理店、子供の集まった駄菓子屋などが眼にとまった。ふと見ると平家《ひらや》造りの小学校がその右にあって、門に三田ヶ谷村弥勒高等尋常《じんじょう》小学校と書いた古びた札がかかっている。授業中で、学童の誦読《しょうどく》の声に交まじって、おりおり教師の甲走《かんぼしった》高い声が聞こえる。埃《ほこり》に汚よごれた硝子¹《がらす》窓には日が当たって、ところどころ生徒の並んでいるさまや、黒板やテーブルや洋服姿などがかすかにすかして見える。出《で》はいりの時に生徒でいっぱいになる下駄箱のあたりも今はしんとして、広場には白斑《しろぶち》の犬がのそのそと餌をあさっていた。

¹ Имеется в виду современное написание англицизма *glass* «стекло». При заимствовании неологизмов японцы старались подыскать им иероглифическое написание, от которого позже чаще всего отказывались в пользу написания на азбуке катакана. В настоящее время слово пишется как ガラス.

オルガンの音がかすかに講堂とおぼしきあたりから聞こえて来る。

学校の門前《もんぜん》を車は通り抜けた。そこに傘屋《かさや》があった。家中《うちじゅう》を油紙やしぶ皿や糸や道具などで散らかして、そのまんなかに五十ぐらいの中爺ちゅうおやじがせっせと傘を張っていた。家のまわりには油を布しいた傘のまだ乾《かわ》かないのが幾本となく干《ほ》しつらねてある。清三は車をとどめて、役場のあるところをこの中爺にたずねた。

役場はその街道に沿った一かたまりの人家のうちにはなかった。人家がつきると、昔の城址《しろあと》でもあったかと思われるような土手と濠《ほりと》があって、土手には笹《ささや》草が一面に繁り、濠には汚ない錆《さび》た水が檜かしや椎しいの大木《たいぼく》の影をおびて、さらに暗い寒い色をしていた。その濠に沿って曲まがって一町ほど行った所が役場だと清三は教えられた。かれはここで車代を二十銭払って、車を捨てた。笹藪《ささやぶ》のかたわらに、茅葺《かやぶ》きの家が一軒、古びた大和障子やましようじにお料理そば切《き》りうどん小川屋と書いてあるのがふと眼にとまった。家のまわりは畑《はた》で、麦の青い上には雲雀《ひばり》がいい声で低くさえずっていた。

弥勒《みろく》には小川屋という料理屋があって、学校の教員が宴会をしたり飲み食いに行ったり

するということをかねて聞いていた。当分はその料理屋で賄《ま》かないもしてくれるし、夜具も貸してくれるとも聞いた。そこにはお種たねというきれいな評判な娘もいるという。清三はあたりにながなかったのをさいわい、通りがかりの足をとどめて、低い垣から庭をのぞいてみた。庭には松が二三本、桜の葉になったのが一二本、障子の黒いのがことにきわだって眼についた。

垣の隅《すみ》には椿《つばき》と珊瑚樹《さんごじゅと》の厚い緑の葉が日を受けていた。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに残って見える。

このへんの名物だという赤城《あかぎ》おろしも、四月にはいるとまったくやんで、今は野も緑と黄と赤とで美しくいろどられた。麦の畑をつら貫《ぬ》いた細い道は、向こうに見えるひよろ長い榛《はん》の並木に通じて、その間から役場らしい藁葺屋根《わらぶきやね》が水彩《すいさい》画のように見渡される。

応接室は井泉村役場の応接室よりもきれいであった。そこからは吏員《りいん》の事務をとっている室へやが硝子窓をとおしてはっきりと見えた。卓テーブルの上には戸籍台帳《こせきだいちょう》やら、収税帳《しゅうぜいちょう》やら、願届《ねがいとどけ》を一まとめにした書類やらが秩序《ちつじょ》よく置かれて、頭を分けたやせぎすの二十四五の男と五十ぐらいの頭のはげた爺《じじい》とが何かせっせと書いていた。助役らしい鬚《ひげ》の

生《はえ》た中年者と土地の勢力家らしい肥った百姓とがしきりに何か笑いながら話していたが、おりおり煙管きせるをトントンとたたく。

村長は四十五ぐらいで、痘痕面《あばたづら》で、頭はなかば白かった。ここあたりによく見るタイプで、言葉には時々武州訛《ぶしゅうなまり》が交まじる。井泉村の助役の手紙を読んで、巻き返して、「私は視学からも助役からもそういう話は聞かなかったが……」と頭を傾《かたむ》けた時は、清三は不思議な思いにうたれた。なんだか狐《きつね》につままれたような気がした。視学も岸野もあまり無責任に過ぎるとも思った。

村長はしばらく考えていたが、やがて、「それじゃもう内々転任の話もきまったのかもしれない。今いる平田という教員が評判が悪いので、変えるっていう話はちょっと聞いたことがあるから」と言って、

「一つ学校に行って、校長に会って聞いてみるほうがいい！」

横柄《おうへい》な口のききかたがまずわかいかれの矜持《きょうじ》プライドを傷《きず》つけた。

何もできもしない百姓の分際《ぶんざい》で、金があるからといって、生意気な奴だと思った。初めての教員、初めての世間への首途かどで、それがこうした冷淡《れいたん》な幕で開かれようとはかれは思いもかけなかった。

一時間後、かれは学校に行って、校長に会った。授業中なので、三十分ほど教員室で待った。教員室

には掛図《かけず》や大きな算盤《そろばん》や書籍や植物標本《しょくぶつひょうほん》やいろいろなものが散らばって乱れていた。女教員《じょきょういん》が一人隅のほうで何かせっせと調べ物をしていたが、はじめちょっと挨拶《あいさつ》したぎりで、言葉もかけてくれなかった。やがてベルが鳴る、長い廊下を生徒はぞろぞろと整列してきて、「別れ」をやるとそのまま、蜘蛛《くも》の子を散らしたように広場に散った。今までの静謐《せいひつ》とは打って変わって、足音、号令《ごうれい》の音、散らばった生徒の騒《さわ》ぐ音が校内に満ち渡った。

校長の背広《せびろ》には白いチョークがついていた。顔の長い、背の高い、どっちかといえばやせたほうの体格で、師範《しはん》校出の特色の一種の「気取り」がその態度にありありと見えた。知らぬふりをしたのか、それともほんとうに知らぬのか、清三にはその時の校長の心がわからなかった。

校長はこんなことを言った。

「ちっとも知りません……しかし加藤さんがそう言って、岸野さんもお存じなら、いずれなんとか命令があるでしょう。少し待っていただきたいと思います……」

時宜《じぎ》によればすぐにも使者《ししゃ》をやって、よく聞きただしてみてもいいから、今夜一晚《ばん》は不自由でもあろうが役場に宿とまっ

てくれとのことであった。教員室には、教員が出たりはいたりしていた。五十ぐらいの平田という老朽《ろうきゅう》と若い背広の関せきという准《じゅん》教員とが廊下の柱の所に立って、久しく何事かを語っていた。二人は時々こっちを見た。

ベルがまた鳴った。校長も教員もみな出て行った。生徒はぞろぞろと潮《しお》のように集まっては行って来た。女教員は教員室を出ようとして、じろりと清三を見て行った。

唱歌の時間であるとみえて、講堂に生徒が集まって、やがてゆるやかなオルガンの音が静かな校内に聞こえ出した。

三

村役場の一夜《ひとよ》はさびしかった。小使の室へやにかれは寝ることになった。日のくれぐれに、勝手口から井戸のそばに出て、平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めていると、身も引き入れられるような哀愁¹《かなしみ》がそれとなく心をおそって来る。父母ちちははのことがひしひしと思い出された。幼いころは兄弟も多かった。そのころ父は足利《あしかが》で呉服屋をしていた。財産もかなり豊かであった。七歳の時没落して熊谷《くまがや》に来た時のことをかれはおぼろげながら

¹ Здесь в виде исключения автором используется вышеуказанная транскрипция вместо привычного прочтения айишйуу.

覚えている。母親の泣いたのを不思議に思ったのをも覚えている。今は——兄も弟も死んでしまって自分一人になった今は、家庭の関係についても、他の学友のような自由なことはいってられない。人のいい父親と弱々しく情愛の深い母親とを持ったこの身は、生まれながらにしてすでに薄倖《はっこう》の運命を得てきたのである。こう思うと、例のセンチメンタルな感情が激はげしく胸に迫《さこ》せまってきて、涙がおのずと押すように出る。

近い森や道や畠は名残りなく暮れても、遠い山々の頂《いただ》きはまだ明るかった。浅間の煙が刷毛《はけ》ではいたように夕焼けの空になびいて、その末がぼかしたように広くひろがり渡った。蛙《かわず》の声がそこにもここにも聞こえ出した。

ところどころの農家に灯ともしびがとぼって、唄《うた》をうたって行く声がどこか遠くで聞こえる。

かれはじっと立ちつくしていた。

ふと前の榛《はん》の並木のあたりに、人の来る氣勢けはいがしたと思うと、華《はな》やかに笑う声が出て、足音がばたばたと聞こえる。小川屋に弁当と夜具を取りに行った小使が帰って来たのだと思っていると、夕闇の中から大きな夜具を被《かす》いた黒い影が浮き出すように動いて来て、そのあとに女らしい影がちょこちょこついて来た。

小使は室のうちにドサリと夜具を置いて、さも重かったというように呼吸いきをついたが、昼間掃除し

目次

一.....	3
二.....	10
三.....	15
四.....	24
五.....	29
六.....	35
七.....	48
八.....	51
九.....	54
十.....	61
十一.....	62
十二.....	68
十三.....	81
十四.....	93
十五.....	100
十六.....	120

十七.....	121
十八.....	127
十九.....	128
二十.....	136
二十一.....	139
二十二.....	143
二十三.....	146
二十四.....	155
二十五.....	159
二十六.....	166
二十七.....	177
二十八.....	179
二十九.....	184
三十.....	199
三十一.....	200
三十二.....	208
三十三.....	212
三十四.....	216
三十五.....	220
三十六.....	226
三十七.....	228
三十八.....	233
三十九.....	236
四十.....	236

四十一.....	239
四十二.....	248
四十三.....	249
四十四.....	252
四十五.....	256
四十六.....	261
四十七.....	263
四十八.....	264
四十九.....	269
五十.....	272
五十一.....	283
五十二.....	283
五十三.....	284
五十四.....	285
五十五.....	286
五十六.....	287
五十七.....	295
五十八.....	297
五十九.....	303
六十.....	305
六十一.....	307
六十二.....	310
六十三.....	312
六十四.....	315